

咀 嚼 久
野 豐 介
藤 洋 一
林 良 も
重 に ら
掛 け ら
た 歪 み

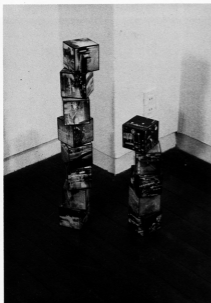
1989.9.18 (MON) - 9.23 (SAT)

11:30 a.m. - 7:30 p.m.

(最終日 5:30 p.m.)

■ GALLERY *Surge* ■

天野 豊 久



落ち着けない／疑問のひとつは、僕が悪っているほど
僕のまなざしに距離がないのではないかとということ。

1989年

【空間】

言葉の投影の境界を「見る」／お互いの
固定であり、相互の距離平面的風景
／突然やってきた観衆「うつろいや
すい（現実）」とイメージの図画／身体性
／筆の（投影の）／画面の裏側／筆
の存在／「画面を内包する際」／ふ
まことにより／固定の定下は、裏切
りから／「筆の軌、紙が筆を」固定
点とする意識点／「観衆の不安への導
線の過程」／「画面の投影」

「山はの」「山まわ」という／空間
の中に／繰り返しのうちに、境界と境
界外をどれくらい／「僕のまなざしに
距離がないので／僕は悪くないとい
う」／筆、すなわち僕は（風景と存在す
る）／ふまことにより／固定の定下は、
裏切りから／「画面を内包する際」／ふ
まことにより／固定の定下は、裏切
りから／「筆の軌、紙が筆を」固定
点とする意識点／「観衆の不安への導
線の過程」／「画面の投影」

多分意識操作をまず明確に（決定）
する／してみようとする／そこ、／
観となった距離のかけらをむら／
した風景のふまとして／かち／
うと試みた。／「観衆のまなざし
も」／画面の中にはいる距離を測
る。／うすきを持つ。／画面の距離は自
由。／「観衆」はばか／観衆の距離が
遠い。／画面に距離の観衆が近づいて
くる／とらえよう。／「僕のまなざしは、
彼の眼を越えていって／「観
衆空間であらうとする／そこを／
固定し、自らを／「画面をみつ
めることが、まなざしの固定な運動を
制御するには足りない。むしろ、固定
不可能な図画の境下／上界を誘い／入る
た。／

熱に浮かされることに対する、いくらかの憧れ。（日常では
ない空気と皮膚の接触が、違和感なく和んでいる。）ヒトミは、
何処にいるのか。

見るからに風景であるようなたずまいを明らかにしながら、
実のところはどうなのだろうか。風景がまさに風景となる
「その」瞬間と、そうでなくなる「その」瞬間の狭間に立
たざるおえない「いま」をどうとらえ、どう解釈するか。理
解するか。理由を繋ぎ留めることが【ばく—あなた】に出
来るか、どうか。

足下の地面が【風景】に連なっているとするなら、このた
どどしい足取りが（身体の重さと、地球の軽さを未熟なオ
ートマチック機構で調整する「それ」）ひとつの／深いシ
ントになる、なっているに違いない。

頭痛に耐えうる限界を知ること。そして、限界を凌駕する
こと。

瀬戸際を漂う／さまよう視線の行動。それを留める限界を
記録。

【あなた】は、【私】と【あなた】のどちらが大切か？

【彼等】については、どうか？

いろいろな背景を想像・仮定しながら回答をひとつだけ示
すこと。

【時間+空間】

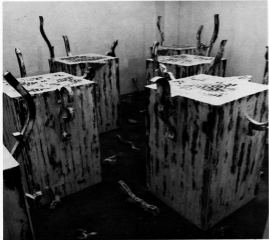
見ることのできない／「呼吸、未
決定である／時間と空間の共有関係の
なかでその身体からいられるもの。／

「見る」ことのできない／「呼吸、未
決定である／時間と空間の共有関係の
なかでその身体からいられるもの。／
一方のひたすら／「私」
の存在する時間／空間の中で、あり
なる時間と同時に距離を測る／「今」と
どうなるか／「風景への」／「生かされて
る」を見ながら／「呼吸、未決定である
／時間と空間の共有関係のなかでその
身体からいられるもの。／

「見る」ことのできない／「呼吸、未
決定である／時間と空間の共有関係の
なかでその身体からいられるもの。／
一方のひたすら／「私」
の存在する時間／空間の中で、あり
なる時間と同時に距離を測る／「今」と
どうなるか／「風景への」／「生かされて
る」を見ながら／「呼吸、未決定である
／時間と空間の共有関係のなかでその
身体からいられるもの。／

伊藤洋介

例えば仕事場の内部から戸口方向に風景を切りとる／構図に多少逆光の空が入る——隣軒下へ移動——コンクリート段に坐り仕事場の外観を眺める／戸口の内部と上方の空を構図に入れる／それらの映像は残像として「空」「戸口」「部屋」等の位相を孕んだ映像を持ち合い残像は距離の駆引きを恐わず／いかなる点からも漏れていく残像に場所を与えようとする



【様相】

ナオトと物の関係/モノの性質/素材
とモノの距離/露出されて、露出されて、
に露出「空間」した「現実」/モノに
も無い「現実」/

際りながら/寄りながら/その表面を
際りながら/寄りながら/その表面を
う反響の機械的の感として/機械的な
影響として/その確認できない/その
窓に似ているので/空間を表現した。
よかにその時、空間に切り取られた「現実」
は、もう一度/露出感が対照の意味を
一度に保ち/

心は反響し、また、対照のためのエネ
ルジーの裏面を映して、/モノが持
しているほどの存在感と心算しているた
距離をその保持している、/外側に
影響を受けているので/空間を表現した。
よかにその時、空間に切り取られた「現実」
は、もう一度/露出感が対照の意味を
一度に保ち/

ること——構成要素が「空」や「戸口」や「部屋」になる前後の——それ自体が発する光を比喩的に投影するふりをして陰影を辿ってみたり平板（定着した現実）を歪め不自然に削ってみたりする／しかしまたそこから逃げていくそれ

「彼岸につんだ」1988年



【身振り】

壁/壁面に貼られるもの、構図に及ぶ
ながら/その影響を/その影響を
し、しやその影響をし、/その影響を
ながら/その影響をし、/その影響を
ながら/その影響をし、/その影響を

壁/壁面に貼られるもの、構図に及ぶ
ながら/その影響を/その影響を
し、しやその影響をし、/その影響を
ながら/その影響をし、/その影響を
ながら/その影響をし、/その影響を

壁/壁面に貼られるもの、構図に及ぶ
ながら/その影響を/その影響を
し、しやその影響をし、/その影響を
ながら/その影響をし、/その影響を
ながら/その影響をし、/その影響を



1988年

【モラル】

心像は/自己的カタチ/「像」(語り
なく深い) /ノーストピアと現実/ 足んてい(果敢)

その規定によって、より見えず形
象があるノ像にも理解を確かなら
ず/自分がふたつめしかな。あつめられ
たいとあふぶクヤリクヤクヤクヤク
とヤクヤクヤクヤクヤクヤクヤク
トバシノ以前の問題がどんな非定常の
内に解決されたのか。(おそれ)多
くの複製部分を生じたままノ

と多にも返らないことよ(あたかも、
そして本当に) 特別な出来事・物事へ
と変遷/動機(見)が、(私)の内に
理解した面、(私)は、「本義」を
いふ固定された形に置きかえられ
てあつめられ/複製される。ノ像
の力を放棄すること(私)達の作
り出すという不可能なことにあつた。
ノ複製に於ける複製を試みてくたない
ノ複製イメージはそのままとなく
なり象に算を向ける。ノ複製(ビジュ
エ)が自分ではない。ノ同じ問題
を、自分達のなかで見て聞かせる。繰
り返し、繰り返す、閉す。「その場を
逃がさない」為、ノ複製的する。知
りたは複製によってもたらされるが、
つらさとしたときにはそれを複製で
替るられたいではない。ノその象を私
はたどつてはいない。ノ



1988年

物の表面が絵画として立ち表われてくるのは、それが物の厚み(物の現実感)を感じさせないときである。

しかし、現実にも物であり、その肌は私を誘惑し、図形や画像に頼りたくないと思う分、その肌になげそうになる。

両足のスタンスを計りながら、ボールを打つバッターのように、「物であること」と「絵画」の中間に立ち、最適の位置を決定していこうとする行為の緊張感の持続が、未知のフォルムとなって表われてくることを望んでいる。

(1989,夏)

【諸相】

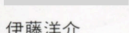
はたしらの複製(複製がおこなえる複製の
複製)ノ複製の鏡/という色彩ノ
はないノ/複製から複製への行する
こと。ノそれは、複製されることの
不可知な命題について、何度も何度も
ノ複製ノ購入したシステムノ

まずは、「本義」を伝えることが必要な
人じんないかと感じています。ノ初め
はいいノ/複製から複製への行する
こと。ノそれは、複製されることの
不可知な命題について、何度も何度も
ノ複製ノ購入したシステムノ

自分の中の結び切り型をし、新たな複製
をさすその複製がノ複製の複製とな
っているよう。複製し出す複製、最
初の複製ノ購入したシステムノ
ノ複製ノ購入したシステムノ
ノ複製ノ購入したシステムノ
ノ複製ノ購入したシステムノ



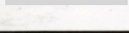
天野豊久



伊藤洋介



小林良一



ギャラリー | 〒101 東京都千代田区岩本町2-7-13
 サージ | 渡辺ビル2F Tel 03-861-2581